
L I V E

倅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I V E

【Nコード】

N 1 2 6 9 C

【作者名】

倅

【あらすじ】

再構成のため、途中で終了しています。

藤村聖は昔父親に連れられて偶然行った有名な海外のアーティストのライブで、幼心に衝撃を受けた。密室に閉じ込められた人の熱気で蒸せ返った会場内、スポットライトに照らされたステージ、そしてその真ん中でそのアーティストは声を張り上げギターをかき鳴ら

している。そのサウンドは聖の心の奥底に響き、成長した今もなお胸を焦がせていた。そして彼に「胸に響くような音楽を作り出すミュージシャンになる」という夢を与えた。デビューまでいくつもの困難にぶち当たるが、仲間の支えと夢の為に聖は走り続ける事を辞めなかった。いつかは自分もステージに立てることを信じて…

第1話（前書き）

お待たせしました！

リニューアル版『TVスター屋さん』です。リニューアルと云いますがそちらを見なくても話はわかります。

芸能界ものですが私も業界人ではありませんので、設定の所々にパ
ラレルが入ってます。苦手な方はご遠慮ください。

第1話

巨大な空間に詰め込まれたたくさんの人の熱気や照明により蒸せた空気が全身にまとわりつき、無意識に固く握り締めていた拳を開いてみると汗ばんでいた。

力を抜けば倒れてしまいそうな程に緊張した身体は衣装で身を包んでいる。

今、始まるうとしているずっとと思い描いてきた時間に鼓動は高鳴った。

舞台袖

メンバー全員で円陣を組み握り締めた拳を円陣の中心、頭くらいの高さに掲げ軽くぶつけ合う。デビュー当時から気合いを入れたりメンバーの心を一致団結させる為に行うポーズだ。

一人ひとり顔を見合わせ頷き合うと、トレードマークのニット帽を目深に被ったドラム、身軽な足取りで歩くキーボードの順で先に入場していった。

袖に残っているのは長い前髪を後頭部の高い所で縛ったベースに、一番長身で髪の毛の短いギター、そして今にも舞台に飛び出していまいそうなくらいにわくわくし、瞳を輝かせているヴォーカル。彼らが長年待ち焦がれていたメジャーデビューして初めての、ライブのステージに今上がるうとしている。

残された3人の位置からは客席は見えていないが、ドラムとキーボードの入場で起こった歓声でかなりのお客が入っていることがわかった。

もう一度顔を見合わせると3人一緒に入場する。彼らの入場で暗転と共にざわついていた会場が一斉に沸き上がる。

明かりが付いたステージからは暗い客席は見えず、眩しい照明に照らされ視界は少しぼやけて見える。

そんな視界の中ギターやベースより少し後ろにいたヴォーカルは、前に立つ2人の後ろ姿が幼い頃見たあの光景と似ている事に気が付く。

照明や熱気で身体の輪郭は柔らかく蜃気楼でも見ているかの様に映り、会場中の視線を浴びて立っている。

あの頃よりその光景は近く、正面からは見えないが見覚えのあるそのシルエットに確信する。

『あの時焦がれた場所に今、立っている…』

もう夢ではない。

胸の奥から沸き上がる興奮に思わず武者震いした。

ヴォーカルの準備が出来た事を確認すると一曲目のイントロが流れた。ギターソロから始まる彼らの代表曲に、会場は熱気に包まれた。

：

ケースにしまったギターを右肩にかけ、左手には未来をかけた歌を綴った楽譜。目の前に立ちほだかる建物の一室に青年、ふじむらこつき藤村聖の明

日を左右するオーディション会場がある。

大手レーコード会社G主催のこのオーディション。今回は本格的なバンドグループをデビューさせるのを目的としており、アマチュア出身のバンドマン達や聖みたいにギターを片手に一人で来てる青年もいる。

オーディション参加者に割り振られた控え室には、たくさんの人であふれていた。オーディションを目前にそれぞれ最後のチューニングに入り、あるグループは軽い音合わせをしていた。

「
」

当然歌を歌ってる参加者もいる。

「俺もうかうかしてらんないな…」

ケースからギターを取り出しチューニングを済ませると、軽くストロークしてみる。

ギターは楽器だけありきちんと手順を踏めば綺麗な音を奏でるが、実は聖は自分自身ギターは上手くないと思っていた。

自他共に認める程歌は上手いが、ギターのテクニックは並かそのちよつと下というか、自分の演奏は心に響いてくるものではない。幼い頃からの夢、“人の心に何か残る音楽を生み出すミュージシャン”になるために、相棒もいない聖は自分の力でなんとかやるしかなかった。

しばらく最後の確認をしていると、ある音が耳に入ってくる。耳をすまして聞いているとその音を作り出している人も聖と同じく、一人でオーディションに参加しているとわかったが…

「…歌、へったくそだな」

お世辞にも歌は上手くなかった。上手くないというか周りの歌につられて、自分の音が取れず音程が不安定になっている。しばらく聞いているとその音の主は歌うのを諦め、今度はギターのための演奏をしていた。

聖は耳を疑った。さっきは上手いと言えなかった演奏が、ギターだけになった途端にプロに近い演奏になっている。

「誰かわかんないけど、このギターとだったら夢も叶うかもしれない…」

そのギターは自分にはない“心に響く”ものがあり、周りに色々なバンドがいる中で、聖はその音に聞き魅っていた。

…

出番も無事に終わり、まだ出番を待つ参加者のいる控え室でペットボトルの温いお茶を一口飲みひと息をつく。自分の中ではなかなかの演奏が出来たと思う。他の参加者かというと聖と同じように力を出しきり満足した表情の者もいれば、失敗してしまったのか悔しそうに拳を握り締めうつ向いてる者もいる。でも自分以外はライバルであり、最高の演奏が出来なかったらそれまでという事だと言い聞かせ彼らを見ないようにする。

…

オーディション最終組が終わったらしく控室の行き来がなくなった。出番の終わった者が集まる室内は少しだけ安堵した空気が漂う。

しばらくたつと控え室にスーツを着た男性が入ってきた。参加者はスーツを来た人間はいなかったので、遂に結果発表なのだろうか
と緊張感でまた周りはしんとなる。

「ああ、ごめんねちょっと呼び出しに來ただけなんだ」

スーツの男は室内が静かになった理由を察したのか、氣をつかつて
くれた。結果発表ではないとわかれると室内が一斉にに安堵したのが
わかる。

「えつと56番の藤村くんと65番の松谷くん、ちょっとこっちに
来てくれるかな？」

普段は落ち着きがないと母親にも叱られる聖はこの建物に入ってか
らは大人しく振る舞っていたので、何か悪い事をして呼び出される
覚えはなく首をかしげながらスーツの人についていった。

：

前を歩く“65番松谷くん”に聖は驚いていた。

驚いたというか男の聖からみても男前だったため、呆氣にとられて
いた。

すらつとした手足に高い身長、整った顔立ちにちょっと洒落た髪型。

「あんたモデルやった方がいいよーっ」

普段の聖ならこう叫んでいたかもしれない。ちなみに聖による聖自
身の評価は“中のそこそこ”。唯一の自慢は目元のみ。目元だけが
自慢じゃあ男前には敵わないと変な張り合いに肩を落とした。

「なあなあ、なんでわしらが呼ばれたんだと思う？」

「さあ、なんでじゃろうね…、俺にも覚えはないっす。」

「わしと君、今日初めてあつたよね？」

「うん、間違いないべ。俺の知り合いには“わし”っていう奴おらへん……って…わし!？」

きよんとした表情で見つめる“男前松谷くん”に、その表情も素敵ね…なんて見とれてる場合ではないと首を振る。

「？わしの話聞いてた？」

男前なのに自分の事わしと呼ぶところや声と見た目のギャップのせいか、無意識に会話をしていた聖も思わず変な方言が混ざってしまった。

「聞いてましたよ。俺もまったく覚えがないです」

「だよね〜。わしもさっぱり」

あつ、この人笑うとまた印象が違つ。と恋する女の子のように思つてしまいまた首を激しく振る。

…

「失礼します、お二人を連れてきました」

スーツの人に連れられて別室にやって来た聖と男前。スーツの人に

ならって失礼しますと頭を下げ部屋に入ると、正面にはさつきオーディション会場にいた審査員がいた。

男前となんだろ？と顔を見合わせる。

「ああ、志水くんご苦労様」

「いえ、藤村聖くと松谷葉瑠くんです」

男前は松谷葉瑠まつたにはると言うらしい。歩いているときにも高いと思っていたが横に立った葉瑠は、やっぱり背が高い。

「藤村くん、松谷くんオーディションお疲れ様。とりあえずそこに座ってくれ」

2人は言われた通り正面の椅子に座るがますます呼ばれた理由がわからない。

「藤村くん、何で自分がここにいるかわからないって顔してるね」

「はい…」

「賢そうな松谷くんは、ここに入ったら何となく理由はわかったみたいだよ？」

「そうなの？」

「まあ、何となくですが…」

審査員の真ん中に座るプロデューサーは、書類に一度目を通すと前を向き言った。

「おめでとう。君たちはオーディション合格だ」

てつきり合格発表ではないと思っていた聖は、いきなりの合格の通知に目を丸くして驚く事しかできなかった。

第1話（後書き）

いかがでしたか？TVスター屋さんとはちょっとだけしか似てないかと思います。私の根気次第ですが今考えてる感じでは、このお話とはかなり長い付き合いになりそうです。

これからもよろしくお願いします。ここまで読んで下さりありがとうございます！

第2話（前書き）

第1話からだいぶ遅くなってしまいました。続きです。

第2話

今から12年前の7月の暑い日、都内某所にあるアリーナ。海外で人気のある日本でも有名なアーティストが初めて日本でのライブを1日だけやることになった。

会場は日本でも大規模なアリーナが選ばれた。そのアーティストは日本でも大人気のためチケット発売開始から数秒で売り切れるという状態だった。

そのアーティストの熱狂的ファンだった父親がチケットを幸運にも手にいれ、当時8歳だった聖は父親に手を引かれライブへ行った。まだ幼い聖は家でアニメを見る方がよかったが、何事にもあまり熱くならない父親が子どものように目を輝かせそのアーティストについて語りだし、どうしてもというので一緒にいったのだ。ところがライブが始まると聖は彼に釘付けになる。

決して狭くない会場なのに狭く感じてしまうほどにぎゅうぎゅうに入った人達で蒸せ返った空間に、スポットライトを浴び観客の視線を集めステージの真ん中でギターをかき鳴らして歌っているアーティスト。違う国の言葉で歌う彼の歌は幼い聖には理解できなかったが、その作り出す音と光景に胸をうたれた。

普段聞くことのないような大音量で流れる音楽に聖自身の胸の鼓動も同じビートを刻み、盛り上がった観客による振動と高く突き上げられた拳、そして熱気とスポットライトによってなのか少し輪郭がボヤけて見えるアーティスト。

そのすべてが聖の目と耳に焼き付き盛り上がる会場の中、一人だけ取り残されたような錯覚を覚えた。ただ立ち尽くしてステージを見てい

た。

：

突然の合格発表から数日後、聖はまた事務所を訪ねていた。プロデューサーから与えられた一室に籠り曲作りの真っ最中で、隣にはあの時に一緒に合格した男前、葉瑠がいる。

バンドをデビューさせるつもりだったプロデューサーだが、聖の歌と葉瑠のギターに惚れこの2人でユニットを組ませる事にしたのだ。プロデューサー曰く、

『今日オーディションに来ていたどのバンドより、君たち2人を組ませた方が実力がある』

らしい。

偶然なのか運命なのか、聖が控室で聞いた“心に響くギター”を奏でていたのは葉瑠だったのだ。あの時のギターを弾いていたのが葉瑠であったことにはじめは驚いたものの、葉瑠とだったら夢が現実となるのも遅くはないと確信した聖。

自分がギターが下手なら葉瑠が、葉瑠の歌が下手なら自分がカバーしあえばどんなバンドにも負ける気がしない。聖も葉瑠も考えが一緒だったし、2人共バンドにこだわっていた。

『今は2人だけどいつかはわしらとベースとドラムとキーボード入れて、日本一のバンドになろうな』

オーディションの後の葉瑠はそういった。聖も同じ事を思っていた

ため、葉瑠がそういつてくれて嬉しかった。
同じ夢を志す者同士、ちよつと時間が経てば仲良くなるのも簡単であつた。

聖は詩を考え葉瑠はギターをポロリポロリと弾いているが、耳を澄まして聞いてみるとどこかで聞いたメロディである事に気が付く。

「なあ、葉瑠」

「ん？」

「その曲つて…」

「ハプニング娘、」

ハプニング娘、とは10代から20代の女の子が何人かで構成されたアイドルグループで、30代前後のお兄さん達に人気があつた。まさか葉瑠もファンのお兄さんの1人なのだろうか？

「…曲考えてるんじゃないか？」

「いや、この“愛機械”のコード進行が弾いてて楽しくつてさ、なんかヒントにならないかなって」

“愛機械”とはヘビーな名前だが彼女らの名前を世に知らせた代表作だ。ファンという訳ではないようだが、彼がハプニング娘、を譜面なしで弾いてしまうことに軽く驚く。葉瑠の見た目だとロックだとかビジュアル系の曲を好んでそうなのだ。それを本人に聞くと、

「邦楽は割りとなんでも好きだよ。ハプニング娘、もだけどカツンとかのジヨニさん系も好きだし、和田アキラとか西島さぶも。最近のヒットは浜田かな」

アイドルから演歌まで大丈夫らしい。

「でもわしの本命はあの人かな」

「あの人？」

「そう。」

葉瑠は脇に置いてあつたスタンドにギターを立て掛けると、一度座り直す。

「昔姉ちゃんに連れられて海外の有名なアーティストのライブ行つてさ。もの凄い衝撃を受けたんだ。わしはちっさかったから名前も顔も覚えてないんだけど、その人が一番かな。今この道に進んでるのもあの人に憧れてなんだ」

葉瑠はその時の事を思い出しているらしく、目がキラキラと輝いていた。

「ライブの日本公演はその一回きりで、次のチャンスを待ってたらその人引退しちゃって名前も顔も覚えずにだったけどな」

「なんか俺と似てるかも……」

「似てる？」

ゆっくりとした動きで首をかしげる葉瑠。

「そう。俺も葉瑠と一緒に確か8歳だったかな、そんなくらいの時に親父に連れられて海外アーティストの一回限りの日本公演にいったんだ。そしたらさその光景に身体が動けなくなっちゃって、いつの間にかこの道を選んだ」

「へえ…なんかあまりにも境遇が似すぎてるな」

「もしかしたら同じ会場にいたのかもな」

2人はまさかな〜と笑いあうが、実はそのまさかで2人共同じアーティストの同じライブで衝撃を受けていたのだった。

2人がそれを知るのももう少し後になる。

：

曲作り開始から数カ月が経ち、相変わらず2人は事務所の一室で頭をかかえていた。なかなか満足のできる曲が出来上がらないのだ。ミュージシャンとしてデビューするからには、自分達の満足出来る仕上りのものを世に送りだしたかった。デビューするからには一発屋なんてなりたくない。ものすごい人気はなくても世の中に認められる様な、そんなミュージシャンになる。

2人の気持ちは一緒だった。思い通りにいかないもどかしさはあったものの、よく話し合っては曲を書き直しまだ聞きなす。その繰り返しだった。

そうしているうちに、事務所の後輩のデビューが決まった。事務所との契約は聖達の方が早いが、彼ら“LACKS”はインディーズとして活躍していた頃から実力派バンドとして注目されていて契約は遅いものの、メジャーデビューは聖達よりも先輩となる。歳も近

いこともあり、聖達は曲作りの合間に彼らと交流する機会があった。

「俺達なんてラッキーっすよ。プロデューサーの娘さんがファンらしくって、俺らを押してくれたんです」

リーダー格でヴォーカルをつとめる智尋がある日そんな事をいった。

「コネを使っつていうんですかね…。でもこれからは実力で上がってやりますよ！」

デビューのきっかけはコネでも、それから先は自分達次第といった彼ら。しかしそれは聖達のデビューと同時に思わぬ展開へと転がってしまふのだった。

第3話（前書き）

かなり久しぶりの更新となっていました（汗）

第3話

「聖さん、葉瑠さん！デビューの日にちが決まりましたよ！」

例の如く事務所の一室で曲作りをしていた2人の元に、慌てた様子でマネージャーがドアを開けて入ってきた。

彼は2人よりも少し年上で名を志水真幸しみずまさゆきといい、オーディション会場で2人をプロデューサーの元へ連れて行った本人だった。志水がマネージャーだと知った2人は変な偶然に驚いたが、いざ付き合ってみれば誰よりも2人を応援してくれているので単なる偶然ではなかったのかもしれないと思っていた。

「んあつ？」

志水の言う内容がいつもの様に食堂のメニューや朝の占いの良し悪しではなかったため、いつもは無視するかのようにギターに夢中な葉瑠も変な声をあげて志水を見る。葉瑠とは反対にきちんと志水の相手をする聖も、今回は口を半分開いた状態で固まっていた。

2人ともかなりのマヌケな表情である。

「んあつ？じゃないですよ！デビューの日にちが決まりました！」

「おっ…おお」

「葉瑠さん、かなりおバカな反応は辞めて下さい。いい男台無しですよ。聖さんそんなぽかぁんとしてたら、その口にゴボウ入れますよ」

本当にゴボウを口に入れられても嫌なので、慌てて口を塞ぐ聖。2人をマネージメントする立場でありながら下からも上からももの

を言わずに対等でいようとする彼と、そんな彼を時には兄のように慕い時にはついついこき使ってしまう2人。ただのいい兄ちゃんに思われがちな志水だが実はしっかりもので、きちんと時と場合を心得ている為に2人の好き勝手にやらせることはなく、そんな厳しい一面も2人は好きだった。

「お二人ともしっかりしてくださいよ。デビューですよ、デビュー！この間完成した曲をプロデューサーがいいっていつてくれてから、すんなりと日程が決まったんですよ！」

まるで自分の事のように喜ぶ志水。オーディションの時に二人と出会ってからいつも近くで雑用をこなし、自分の仕事は終わっても

「聖さんや葉瑠さんが困るといけませんから」

といて遅くまで残り夜食の手配をしたり。

志水も二人が表舞台に立つのを夢見てきた一人であり、いなくてはならない二人のチームの一員でもあった。

志水が二人に説明したデビューの日程はこうだった。

まずは事務所の先輩であるLACKSが司会をつとめる歌番組に出演し、LACKSの後輩として紹介してもらい曲とメンバーの披露し宣伝させてもらい、さらにその後同事務所の先輩のニューシングルと後輩のデビューシングルの同日リリースを話題として売りだそうということだった。

「僕はデビューシングルの事務所でも人気のあるLACKSのニュ

ーシングルと同じ日にリリースしたら出だしから良くないのではと思います。が、社長の意見なので…」

「事務所の先輩と同じ日にリリースしたところで、わしらには何にも不都合はないよな」

「そうそう、せっかくLACKSに推してもらえるいい機会なんだし、志水さんが気にすることはないですよ。売れることよりまずは名前くらい覚えてもらえば上等！」

「初めから一番じゃ面白味がないですって」

志水もマネージャーをやっただけあり、事務所の人気のある先輩グループと同日にリリースすれば聖達の曲は彼らを上回ることはないだろう…と心配をしていたが、二人はそのことより

「自分達の曲が世の中に売り出せる」という事実の方が嬉しいようだ。

「やったな！ついにリリースか。長かったな」

「ああ！確かLACKSの番組といえば生放送だったよな？わし、ちゃんとギター弾けるかな…」

ようやく決まったデビュー曲リリースと生放送番組出演に早くもわくわくとする二人。

最初は聖達の曲の売り出しの心配をしていたが、徐々に事務所の思惑通りにはいかない気がしてきた志水はそんな二人を見ながら二人の今後を思った。

『果たして社長の考えは上手く行くのだろうか…。プロデューサー』

や僕の場合は確かには……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1269c/>

L I V E

2011年3月8日22時35分発行